

コナラは、アカマツとともに島根県内の里山を代表する木です。人の影響がほとんど入っていない大昔には、コナラなどはほとんどなく、現在の里山はシイやカシなどの常緑広葉樹に覆われていたと考えられています。今から約600年前の室町時代ごろから人の影響が増加し、もともとあった森を切り開いた後に茂った森（二次林）は、太陽の光を好むコナラやアカマツの森へと代わっていきました。

15～20mになる落葉高木で、北海道から九州、朝鮮半島に分布しています。コナラは、ドングリをつける木としてもよく知られています。「ドングリの木」には、コナラなど落葉するナラのなかまと、常緑のシイやカシのなかまと大きく2つのグループがあります。コナラのドングリは細長く長さ1.5～2cmで、マテバシイなどと異なり1年目で成熟します。

コナラの名の由来は定かではありませんが、同じなかまで葉やドングリが大きなミズナラに対して付けられたのではないかと思います。ちなみにコナラは葉の長さ5～15cmで、ミズナラは葉の長さ5～20cm（ドングリの大きさ1.5～2.5cm）です。

材は木炭の原料やシイタケのほだ木、建築・器具材などに利用されます。また、燃料革命が起こる前の昭和30年頃までは、貴重な燃料として使われました。このほか、コナラの根にはキノコの菌が共生して菌根を形成するため、手入れされたコナラの林には多くのキノコが発生します。



▲ コナラの葉とドングリ



▲ コナラの新葉